

鬼哭

死譚

きこくしたん

Takahashi Naoki

高橋直樹

中央公論社

鬼哭

きこくしたん

死譚

きこくし たん
鬼哭死譚

一九九八年 三月二五月初版印刷
一九九八年 四月七月初版発行

著者 高橋直樹 たかはし なおき

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社

〒一〇四―八三三〇

東京都中央区京橋二―八―七

電話 販売部 (〇三)三五六三―一四三一

編集部 (〇三)三五六三―三六六六

振替 〇〇―一二〇―四―三四

印刷・製本 大日本印刷

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

目次

一番槍

5

狂女

65

最後のはぐれ山賊

101

命懸け

197

装丁
多田和博

鬼哭死譚
(きこくしたん)

一
番
槍

一

賤ヶ岳しずがたけの東に向き合う田上山の羽柴小一郎本陣から、桜井左吉が汗を飛び散らせて馬を駆り、その知らせを十三里（約五十二キロメートル）離れた大垣にもたらししたのは、天正十一年四月二十日の午の刻（正午）過ぎだった。

「申し上げます。佐久間玄蕃げんぱが隊およそ八千、昨夜丑の初刻（午前一時）ころ、行市山ぎょうしやんの本陣を発ち、権現坂から川並に下り、余呉湖畔よごを巡って、今晩寅の刻（午前四時）ころ尾野路浜おのろ到着。ただちに大岩山砦に向って攻撃を開始。大岩山のお味方、中川瀬兵衛殿、ご奮戦も及ばず敗軍お討死。大岩山砦は佐久間玄蕃が手中に落ち申した」

「うぬ！」

一声うなって羽柴秀吉は中食ちゆうじきを摂っていた箸を投げ捨てた。箱膳に並べられた汁や干魚にちらと眼を落とす。

「続けよ」

秀吉にうながされ、左吉は柴田勝家の家中随一の猛将、佐久間玄蕃盛政の大岩山砦占拠後について報告を行ないはじめた。

「大岩山砦陥落の後、大岩山に連なる岩崎山砦の高山右近殿、敵わずして田上山の御本陣までご退却。岩崎山も佐久間玄蕃がものとなり申した」

「賤ヶ岳の砦はいかがした」

秀吉が口を挟む。

「それがしが田上山を発った巳の刻（午前十時）にはいまだ佐久間勢の賤ヶ岳砦攻撃は行なわれており申さぬ。美濃守様（羽柴小一郎秀長）は岩崎山陥落を見届けた後、それがしに早馬をお命じになりました」

「うむ、わかった。他に申しつかったことはないか」

「一点ございます」

左吉はつと居住いを改めた。金太郎のような丸顔が緊まる。

「大岩山、岩崎山に入った佐久間玄蕃が勢は陣を固め、当番の兵どもは小屋掛をはじめており申す」

「小屋掛とな」

秀吉は訊き返した。

「御意」

左吉の童顔が輝き、深くうなずいた。

「玄蕃め、大岩山に居座るつもりじゃな」

手を揉み合わせ秀吉はにやりとした。先ほど投げ捨てた箸を拾う。

「左吉、苦勞であった。わしは一刻のうちにはこの大垣を發つて木ノ本まで戻る。のんびり腰をすえた佐久間玄蕃の前にわしがツラを出し驚かせてやるのが楽しみじゃ。左吉、汝も供をせよ、大合戦になるぞ」

みるみる精氣にあふれはじめた秀吉を仰ぎ、左吉は意氣込んで「御意！」と叫んだ。

「左吉、大垣まで相当に飛ばしたであろう。馬はどうした」

「乗り潰し申した」

誇らしげに答える。

「わしの馬を一頭やる。早馬の褒美じゃ。遅れをとるなよ、左吉」

楽しげな眼で左吉を見やった。

「殿に恥をかかせはいたしませぬ。この桜井左吉、命を的のご奉公を御覽に入れ申す」

「その意氣じゃ」

秀吉の目尻が下がった。

「だがあまり張り切り過ぎぬよう戒めよ。そなたらはこたびの合戦がお披露めじゃ。まだ生命を売るには少々早い。上手く戦う術も侍には大切ぞ」

一途な左吉を諭すように秀吉は附け加えた。

桜井左吉が秀吉のもとに賤ヶ岳の急変を知らせたとき、大垣の城には秀吉の馬廻り衆が詰めていたのみで、一万五千の軍兵のほとんどは揖斐川の渡りで雨待ちの最中だった。

賤ヶ岳附近の戦況を横眼に見ながら、羽柴秀吉が近江の長浜を発したのは四月十七日。一路岐阜へ押し寄せんとした。岐阜城主、織田信孝が近江の戦陣に釘付けとなっている秀吉の背後を狙って挙兵したのだ。秀吉軍は十九日に岐阜城へ総攻撃をかける予定だったが、折からの大雨によって揖斐川が氾濫し、船筏を流され足止めを食わされていたところだった。

雨待ちの軍兵たちに急使が飛んだ。

——全軍はただちに陣払いし木ノ本まで引き返せ。兵糧、馬の飼料その他荷になるものはすべてその場に置き捨てよ。なお徒歩の者については、鉄炮、槍、刀はもちろん具足も脱ぎ捨て身ひとつとなって走れ。木ノ本まで十三里（約五十二キロメートル）を二刻半（五時間）以内で駆けよ。秀吉より発せられたこの指令を大岩山に居座る佐久間盛政が聞いたらさぞ仰天したことであろう。当時一日の行軍距離はおよそ五里（約二十キロメートル）ほどであった。一軍の備えは徒歩の足軽を中心に成り立っている。重い具足を着込み槍や鉄炮をかついで駆け通すことなどできるものではない。さらに備えには食糧弾薬などを運搬する小荷駄隊が必ず附く。重い荷を負った牛馬や小者たちの進度が蝸牛のごときであったことは言うまでもない。

だが羽柴軍の將士たちは秀吉の指令を受けるや、ためらうことなくすべてを投げ捨て駆けはじめた。

——兵糧、馬の飼料、足半^{あしなみ}、松明^{たいまつ}等は沿道にて土地の百姓どもが奉仕いたす。また足輕衆の武器並びに弾薬は長浜城より木ノ本へ届くべし

秀吉はそう伝えていたのだ。

賤ヶ岳の急報に接するや、秀吉は即座に兵站部^{へいたん}を指揮する石田佐吉（三成^{みつなり}）を呼び、長浜、木ノ本へ向けて出発させた。沿道の村々の庄屋たちに食糧松明の用意をさせ、長浜城の武器蔵から大量の武器弾薬を、出撃拠点の木ノ本に運ばせるためである。

柴田軍動く。

それは山崎で弑逆^{しがいぎやく}者明智光秀を討ち、織田軍団の継承者として名乗りを上げた羽柴秀吉が、その地位を不動のものとするための吉兆だった。

三

大垣城の秀吉は、揖斐川の渡しに駐屯する軍勢と石田佐吉らの兵站部に必要な指令を発し^おえると、馬廻り衆に対し未の刻（午後二時）に出立する旨を告げた。桜井左吉の第一報からわずか一刻（二時間）余り。馬廻り衆の内からにわかに活気^わが湧き起った。みな急いで湯漬^わけをかき込み仕度を整える。

「おい、市松^{いちまつ}」

あわただしい気配の迫るなか、長身の武者が、ずんぐりとした身体の武者にささやいた。ずんぐり武者は長身武者の声を聞くと、湯漬けに向ってせわしなく動かしていた箸をぴたりと止めた。口一杯に詰まった飯を呑^のみ下す。

「ひ、兵助殿^{ひょうすけ}」

ずんぐり武者は潰れた声を上げた。

「ひ、ひょーすけ殿ではないわい！」

長身武者はずんぐり武者の盆^{ぼん}の窪^{くぼ}をいきなり掌でかっぱじいた。強い衝撃がずんぐり武者の首に加わり、その口腔^{こうくう}から残った飯粒が数片飛び散る。

「はははは」

その様を見て長身武者がかん高い笑い声を上げた。

「なんじゃ市松、そのザマは。まるで出来損ないので、こ人形よ」

ずんぐり武者は眼を白黒させながら、ようやく飯粒を残らず呑み込んだ。打たれたことに腹を立てた様子も見せず箸を置く。

「出立^{しゅつたつ}の刻限までは少し間がありましたしょうほどこに、兵助殿」

ずんぐり武者はまだ食い足りぬ、という表情^{かお}で腕^{うで}に眼を落とした。面がうつむきかけたところで長身武者の手が伸び、ずんぐり武者の髻^{まげ}を思い切り引っ張った。首がこきりと音をたて、ずんぐり武者の顔は、上から見下ろす長身武者の鼻先にすえられた。

「おれが良いことを教えてつかわそうというのじゃ。飯の方に氣をとられるとは無礼ぞ、市松」
長身武者は鬚を握った指先に力をこめた。ずんぐり武者の頭髮の抜けるぶつぶつという音が響く。ぶざまに歪んだずんぐり武者の顔をにやりと長身武者は眺めた。ずんぐり武者の口がぎこちなく動いた。

「まずはそれがしの鬚をつかんだ手を離して下され。これでは話もうかがえませぬぞ、兵助殿」
長身武者は知らぬふりで鬚をつかむ力をさらに強め、ずんぐり武者が身体の平衡を失って手足をばたつかせたところで突然手を離れた。ずんぐり武者は反動で前のめりになったが、起き上りこぼしのように半身を元に戻し座り直すと、何事もなかったように訊ねた。

「兵助殿、良き話とはいかに」

「うむ」

長身武者も何事もなかったようにどつかと座り足を組んだ。

「市松、明朝は賤ヶ岳で大合戦じゃ」

「いかにも」

ずんぐりとした首でうなづく。

「明日の合戦、われら馬廻りにとって、この上なく甘いものとなるうぞ」

ずんぐり武者が意外げな表情をすると、長身武者の腫が虎のように光った。

「市松、わからんのか。明日の合戦でわが殿が柴田修理（勝家）を斃せば、わが殿は亡き右府様（織田信長）の御遺領をそっくり頂戴することになる。六十六州の半分を御手にされるのじゃ。」

そうなればもはやわが殿は昨日までの羽柴筑前はつぜんではない。おそらく明年あたりには征夷大將軍じや。殿が將軍ならわれらは將軍家奉公衆ということになる」

長身武者はいったん言葉を切ると、くぐもった忍び笑いを洩らした。唇をなめ話を続ける。

「將軍家奉公衆に二、三百石の木端侍こっばがずらっと揃そろっておったのでは外聞も悪からう。抛よつて殿は明朝の合戦で手柄を立てた者に、こちらの眼がまわるほどにご加増下さることを決められたのよ」

「われら馬廻りが御本陣を離れ一騎駆けを許されるということにございますや、兵助殿」

「いかにも」

長身武者は食いつくような表情かおになったずんぐり武者の低い鼻を軽く掌で打ち、愉快げに高笑いした。

長身武者の名は石河兵助いしご一光かずみつ、ずんぐり武者の名は福島市松正則まさのり。ともに羽柴筑前守秀吉の馬廻りをつとめる若武者だった。

四

未の刻（午後二時）丁度、大垣城大手門前に羽柴秀吉の高声が響き渡った。

「みなもの者、出立じやあ」

秀吉の大声は旧織田家中でも知らぬ者がなく、名物と言ってもよいほどだったが、この日の秀